

『ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集』(5)

黒川 知文

社会科教育講座

The Materials for the History of Anti-Jewish Pogroms in Russia (5)

Tomobumi KUROKAWA

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1881年4月15日から翌年29日にかけて、帝政ロシアの南ロシア地方において、ユダヤ人に対する暴動事件であるポグロムが広範囲にわたり発生した。

このポグロムに関する政府による調査報告書が革命後の1923年に出版されたクラスヌイ＝アドモニによる『資料集』(Материалы для истории антиеврейских погромов в России)である。この『資料集』は国立出版所によりペトログラード市アレクセーエフ国立学術実務学校印刷所において1000部印刷された。本文528頁に付録がついて540頁に及ぶ膨大な量の資料集である。第一部は地方当局による報告書、第二部は内務大臣にクタイソク伯が内務大臣にあてた報告書である。『資料集』第一部の和訳は、すでに以下においてこれまで発表されている。

- ・「ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集(1)」『愛知教育大学研究報告』第58号, 2009年
- ・「ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集(2)」『愛知教育大学研究報告』第59号, 2010年
- ・「ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集(3)」『愛知教育大学研究報告』第60号, 2011年
- ・「ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集(4)」『歴史研究』愛知教育大学歴史学会第58号, 2012年

第101号

国家警察局長閣下へ。

本年4月26日と27日にキエフにおいて発生した騒乱は、ユダヤ人に対する憎しみから出た偶然の現象でも一時的な出来事でもなく、むしろ逆に、以前からの熟慮にもとづく出来事だった。町のチンピラたちは、みな騒乱について触れ回っており、準備を整え、時間を定め、光明キリスト祭のような、指定した日が来るのを待っていた「(辻馬車の御者の話第575号)」。もし最初から精力的な処置が講じられ、軍による封じ込めと包囲が

なされ、騒乱が起きた地区にいる全員の逮捕といった措置がとられていれば、民衆の感情が高ぶることもなく、略奪に走ることも、銃器を用いて鎮圧することもなかったのだ。群衆は初め、軍隊や警察を明らかに恐れていた。しかし、自分たちの横暴を抑止せず、むしろ、笑顔で奨励している様子を見るや、彼らは、我を忘れ、勢いを増し、あらゆるものを虚無に至らしめたのである。翌日、反政府分子が煽動したので、彼らの行動はなおさらエスカレートした。目撃者として、私は、見たことをお伝えする。4月26日1時、町では、ポドリにおいて騒乱が起こるとの噂を耳にした。2時、当地、運河の向こう側で、騒乱が発生。第33との記号を持つ肩章をつけた兵士が、中尉の指揮の下、銃を持って通り沿いに立っていた。彼らの側には、数人の警察官と分署長がいた。文字どおり10歩離れた所に、30人以下の群衆が、角にある二階建てのユダヤ人学校を破壊し、民家の家財道具や宗教用具を表に放り出し、ゲラゲラ笑いながらそれらを壊し、楽しんでいた。これらの家が終わると、通りの向かい側に渡った。渡った先は、兵士の部隊のすぐ脇であったが、兵士たちは、彼らの行為を大笑いして見ているだけで、我関せずという態度であった。私は、隊長の下に行ったが、彼は次のように答えた。「鎮圧しようにも権利がないのだ。警察から命令や処置がいつさい届いていないのだ。」私は、警察職員に尋ねたが、彼は「私一人で何ができますか?」と答えた。大尉に申し出ると、彼は自分で様子を見に行った。現地では、この半個中隊にとっては、ただ、これらの30人を包囲し、逮捕しさえすれば十分だった。これらの騒乱は、キエフの郊外だけではなく、ジトミルスコエ通りの2つの駅にも影響があった。4月27日グロフシンスカヤ郵便局の側で、農民たちがユダヤ人小作人たちを殴打し、彼らの持ち物を壊し、旅館や飲み屋を略奪した。人々の間の噂では、キエフにおいて騒乱はまだ終わっておらず、日曜日まで延期されていると言われている。1881年4月28日。(Ll. d. 60-61)。

第102号

ペテルブルグ。内務大臣へ。キエフ発1881年5月11日付電報。

現在のところ、若干の都市においてのみ、歩兵隊が兵舎から、その都市の近くにあるテントまで移動した。しかし、ユダヤ人は、これを危険だと感じている。私の意見では、まったく逆である。一日が平穩のうちに過ぎた。地方からは一つの不穩な電報も届いていない。ドレンチェレン。(L. d. 65)。

第103号

キエフ、ポドリスク、ヴォルィンスク総督1881年5月3日。第1595号。内務大臣へ。

4月26日と27日に、キエフとその周辺で起こった、ユダヤ人住民への襲撃の際に、下記の行為のために警官と軍隊によって逮捕された人の数はかなり上る。1) 上記の襲撃に直接参加し、ユダヤ人の資産の徹底破壊と略奪を行った。2) 逮捕の際に当局に抵抗した。3) 通りに残っているユダヤ人の持ち物を自分のものにするために騒乱を利用した。4) 一般に、群衆単位で騒動を起こし、秩序と安寧を破壊した。これらの人々は全員、逮捕された後に、地区警察署から拘留所に収監された。同時に、一方で、裁判所は予審の手続きを開始し、他方で、私が派遣した役人たちは、4月28日に逮捕された人々に対する取り調べや予備質問が最も迅速に進むように裁判所と協力した。これに続く数日間、警察職員は、盗まれたものを調べ、これに関する尋問調書を作成し(すべてのケースについて作成したわけではない)、それを予審判事に渡した。犯人たちは牢屋にいた。このため、牢屋には、以前逮捕された300人の他に、1000人ほどの人がさらに加わったので、キエフの逮捕者拘留用の施設としては便利で広々としていたこの唯一の場所は人で溢れかえった。この後すぐに、正確なデータが集まり次第、閣下には、騒乱発生の原因、経過、発展、また、同時に鎮圧の際に取られた処置について最も詳細な情報をお知らせいたします。今回の事件において、キリスト教徒住民によるユダヤ人襲撃の最も主要な動機は、経済的な関係において自分たちを隷属化した「ユダ公」への根深い憎しみにあったと言わねばなりません。これほど野蛮で不快な形で現れたこの民衆側からの憎しみは、単に民衆たちに留まらず、上流社会を含むすべての階層に浸透した。これに加えて、地元の住民の大衆の間では、近年起こった多くのトラブルや悲しむべき現象を助長したのはユダヤ人自身であり、あの3月1日の皇帝殺害の卑劣な企てもまるで彼らの責任であるかのように考えられていたの

である。住民の大多数の間にこのような空気が流れていたため、陪審員の同席のもとでの訴訟手続き全般において、犯罪現場において逮捕された人々の審議が行われたが、訴訟が公正に終了し、判決が公平に下されることを保証するものは何一つなかったのである。陪審員の判決は、大多数を無罪とすることに決まっていた。最高裁が特別に出席し、各階層の代表者たちが参加する被告に対する審議は(抵抗者の場合のみ合法)、もはや適切な方法ではなかった。というのも、今回の事件を裁判機関の種類によって分けにしても、大多数の人々にとって理解しがたく、また、そもそも本質的に区分が難しいものなので、同一の騒乱の参加者に対する政府側からの多種多様な見解に対して、きわめて好ましくない意見が出てくるからである。結局、一般に認められた審議方式を採用すると、多くの形式に従う必要があるため、決定に時間がかかることは避けられなかったのである。迅速に判決を下すことがなければ、住民の心の中で公平さを取り戻し、被害者の心情を満足させることはできなかった。首謀者と教唆者に関して、判決は無条件に厳しいものであった。迅速な判決は、本質的に重要な要素であり、また、「野蛮な行為は受け入れがたいものであり、重罰に処せられる」ということを住民に示そうとしていた当局にとっては有益な処置であったと思われる。以上の考えに従いつつ、1879年4月5日の皇帝の勅令に応じて、私は、キエフ最高裁判所検察官に対して、「騒乱を調査対象とする予審はすべて、あらかじめ私の裁量に委ねられており、2つの審議の実施(これらはすでに終了している)は、決定を下すために、本日私がキエフ軍管区検察官に委ねた」ことを伝えた。軍法会議の判断に委ねるために、私は、第一に、騒乱の首謀者と教唆者を、第二に、資産の略奪の現場で取り押さえられた逮捕者を、第三に、警察や兵士によって逮捕される際に抵抗した人々を想定した。上記の範疇の他に、かなりの数の逮捕者が牢屋に拘留された。彼らは、通りで群衆の一員となって乱暴を働き、連行された者たちであった。彼らの手には、自分たちが外にまき散らし、その後しばらくの間放置されていた品物があつた。特に多かったのは、最後の範疇の人々であった。私は、乱暴行為を働いた者たちを調停裁判所に提訴しても得策ではないと判断した。それは、一つに、調停裁判所が課す罰則によって、一般的な騒乱を裁くことはできないし、そのような刑罰は無意味だからである。また、もう一つに、調停裁判所が裁判権について口論する可能性があるためである。というのも、調書はすべて、群衆が起こした略奪に関して作成するように指示されていたからである。私は、この過失は警察の不手際によるものであるから、暴力行為による逮捕者たちを行政処分には付す必要があると考えたのである。第一に、所持品のある逮捕者の大部分は、通りで捕まっており、騒乱の

犠牲者ではなかった。第二に、自分の持ち物でないものを持っていることに警察職員が気づいたというただそれだけの理由で彼らは逮捕されたためである。逮捕者のうち非常に多くの人々は、物を公然と持ち歩いており、誰も見張る人々もなく道ばたに落ちていたから拾っただけだと公然と語り、やめろと言われるとすぐに返したのである。私は、この行動を、「民衆による漠然とした横領行為」と判断し、上記の品物を所有することを禁止した。また、キエフ最高裁の検察官との合意に基づいて、この行為は、何よりもまず、宣告日から3週間たたないと提訴できない拾得物横領罪(調停裁判所刑法179条)に該当すると考えた。私は、指定期間前に逮捕された人々と同様に、上記の人々に対しても、データが存在しないため裁判上の責任を問えない、ということに気づいたのである。上記のことをすべて考慮し、暴力行為を働いた逮捕者たちに行政的制裁を適応したが、次の点に言及せざるを得なかった。すなわち、「逮捕者の多くは、大ロシアの各県から仕事を求めてキエフにやってきたばかりの者たちであり、彼らのうちの何人かは、はっきりとした住所もなく、そのため、町の定住者とはいかなる関係もない風来坊であり、いつでも乱暴狼藉や無法行為を働き得る無宿の群衆としか考えられていない」ということである。彼らの多くが略奪に直接に参加し、当局に対して抵抗する者もいたため、このことは、審理において強調された。上記の人々だけではなく、兵器工場や鉄道の修理工場の労働者たちも暴動を起こし、社会の安寧にとって危険な存在となっているのである。なかでも、社会革命党の傾向と目標を持つ悪意の人々によって教唆された労働者が最も危険である。キエフに居住し、家族、定職もあるすべての者たちを警備隊からすぐに解放するための措置を、指示に基づいて講じ、また、それを信頼できる者に委ねた上で、私は、キエフ知事に対して、残りの者たちを、送致規則に則って、故郷にすぐに帰し、キエフには戻らせないよう提案した。民衆の興奮はまだ続いており、その欲求が完全に満たされたわけではなく、再び平静が破られる恐れがある。今日中断している騒乱の再発の可能性がまったくなくなったわけではないことから、以上の処置は必要不可欠なのである。牢屋の満員状態と、最近収まった獄内でのチフスの伝染は、排除すべき人々を、送致規則に基づいて、キエフから故郷へすぐに送致するには、十分な条件であると考えられる。これらを考慮し、収容所長ゲッセによれば早くても2週間後に始まる送致期間を待たずに、「警備隊による警護に関する規則第14巻第220条補注第29号の2」に従い、すぐに彼らを指定地に送致するよう、私は、キエフ県知事に提案した。これは、本日実行に移される予定。侍従武官長ドレンチェレン。(Ll. d. 66-70)。

第104号

N・I・インガチエフ閣下へ。秘。ニコライ・パヴロヴィッチ様。イズヴォリスキー八等官の本年5月5日付の秘密電報をこれに添えて送信いたします。ルーマニア政府からの請願に関して閣下のご判断をいただきたくよろしく御願ひ申し上げます。敬具。N・イールス。(L. d. 71)。

第105号

ブカレスト発1881年5月5日付イズヴォリスキー八等官の秘密電報。

ルーマニアのオデッサ総領事が地元のユダヤ人に襲撃されたという報告をブラチヤノが受けた。領事が警備隊を付けて欲しいと嘆願したのに当局が拒否したと言っており、領事館を警護するよう処置を講じてくれと述べている。(L. d. 72)。

第106号

サンクトペテルブルグ市電報局より。憲兵団からの、1881年5月「7」日付の発信電報。オデッサ総督宛。

参議院官房長官ギルスは下記お伝えいたします。ブラチヤノが、「オデッサのルーマニア総領事館がユダヤ人によって襲撃されたが、わが当局は領事に警備隊を送ることを拒絶した」とか申しております。そして、「領事館を警護するよう処置を講じて欲しい」と依頼してきました。この報告がどれほど確実なものかお知らせください。侍従武官長イグナチエフ伯爵署名。(L. d. 73)。

第107号

ドンドゥーコフ・コルサコフ公からの1881年5月8日付暗号電報の解読文。

閣下が電報において述べておられたルーマニア領事館襲撃について、私は聞いておりませんでした。クドリャフツェを領事館に送ったところ、そのようなことは無いとのことでした。騒乱が発生した時に、領事は警察に警護を依頼しましたが、19人の領事の中で要請をしたのはルーマニア領事だけであり、それは、恐らくユダヤ人が所有する家に自分の部屋があったため、心配になったのだと思います。(L. d. 74)。

第108号

N・P・イグナチエフ伯爵閣下へ。ニコライ・パヴロヴィッチ伯爵様。

南部全県のユダヤ人地主の集落を管理するヘルソン県及びベッサラビア県国家資産局からの電報の写しを、エカテリノスラフ県アレクサンドロフスク郡の14のユダヤ人居住集落における破壊事件に関する私の返答電報を添えて、閣下に拝送いたします。国家資産大臣閣下へ、敬具。オストロフスキー。1881年5月12日。(L. d. 75)。

第109号

オデッサよりペテルブルグへ。5月9日午前12時10分。エカテリノスラフスカヤ県知事、監督官コヴァリスキーから下記のような電報あり。

「農民たちが、トゥルドロフカ、ニェチャエフカ、スラトウカヴォドナヤ、グラフスカヤのユダヤ人集落において家屋を破壊し、すべての家畜を略奪。村民は家畜もパンもない状態。緊急の食糧援助が必要。他の集落においても略奪発生の恐れあり。総督の指示の下でユダヤ人開拓民からの援助を受けるが足りない場合は、必要に応じて、村落共同体金庫から金銭的援助を受けることを許可願いたし。自ら指揮を取るため現地に向かう。」[国家資産局]長チヘエフ。(L. d. 76)。

第110号

オデッサ。国家資産局長チヘエフ宛。要請された援助を許可する。詳細な報告を待つ。署名：国家資産大臣オストロフスキー。(L. d. 77)。

第111号

内務大臣から皇帝への報告。国家警察局扱い。

キエフ、ヘルソン、チェルニゴフ、ヴォルィンスク、ポルタヴァ、エカテリノスラフ、タヴリダ各県及びオデッサとニコラエフから内務省に届いたユダヤ人騒動に関する報告により、以下の考えに裏付けが得られました。すなわち、「これらの騒乱は、悪意のある人々の活動によって起こったことであり、キリスト教徒とユダヤ人の関係を巡ってすでに準備されていた状況をお膳立てとして実現したものである。これら悪意のある人々は、大衆が大騒動を起こすことができるという経験を得たかったのである」という考えです。この考えを確証するものとして、現在、すでにいくつかのデー

タが得られていますが、さらにあらゆる方向からこの考えを明らかにし、騒乱の規模やその内容に関して情報を収集するためには、最も深刻な騒乱が起こった地域に行政経験を持つ人物を誰か派遣することが期待されます。上記の考えを陛下の御判断に委ね、以下について御命令を賜りたく存じます。すなわち、指定の任務を陛下の随員、少将クタイソフ伯爵に与え、同時に、彼に与えられた任務の目的とその遂行の手段に関する陛下の指示を彼に伝えることを許していただきたく存じます。侍従武官長イグナチエフ伯爵。1881年5月12日。(L. d. 82)。

第112号

1881年5月「12」日。D・N・ナビコフ閣下へ。ドミートリ・ニコラエヴィッチ様。

閣下と私の前任者との間の合意により、また、サマルスク県とサラトフ県に関する特殊任務を受けた皇帝陛下の随員、少将クタイソフ伯爵の指示により、サンクト・ペテルブルグ管区裁判所検察官ポストフスキー殿が派遣された。クタイソフ伯爵は、前職から解かれ、皇帝陛下の命令により、最近発生した、いわば、ユダヤ人騒動の起こった地域に派遣され、現在、自分の任務遂行において私に、司法局の官吏としての立場から協力して欲しい、と要請している。それゆえ、閣下に対して、七等文官ポストフスキーが、現在命じられている派遣においてクタイソフ伯爵に随行することを許していただくことを願うものである。また、ハリコフ、キエフ、オデッサの最高裁の検察官たちに、クタイソフ伯爵に協力するよう頼んでいただきたい。敬具。内務大臣イグナチエフ伯爵署名。(L. d. 86)。

第113号

D・I・スヴァトボルク・ミルスキー公閣下へ。ドミートリー・イヴァノヴィッチ様。

ロシア南部で発生した反ユダヤ騒動に関して、情報が内務省に届きました。これについて、私が、皇帝陛下に報告すると、陛下は、陛下の随員、少将クタイソフ伯爵に対して騒乱が発生した地域に出発するようにお命じになりました。それは、彼らが社会革命党の活動とつながりを現地において間近に調べるためでした。そのような陛下の御意向について、閣下に通知することを義務であると考えつつ、「陛下は、クタイソフ伯爵に前述の任務を与え、クタイソフ伯爵を閣下のもとに送ると「う当然の願いを表明された。伯爵を閣下のもとに派遣する目的は、伯爵が、自分に与えられた全般的な命令を一旦脇に置いて、閣下の管轄地域への派遣命

令の遂行に関する最近の指示を得るためであり、また必要なすべての情報を得るためである」ということを言い添えます。敬具 イグナチエフ伯爵。1881年5月12日第2912号。(L. d. 87)。

第114号

国家警察局長。文書事務局扱い。1881年5月12日第2908号。皇帝陛下側近 少将クタイソフ伯爵へ。

内務省に届いたロシア南部において発生した反ユダヤ人騒乱に関する情報について、私は、陛下に報告を提出した。この報告に基づいて、陛下は、騒乱の規模だけではなく、騒乱の原因をも調査させるため閣下を騒乱発生の現場に派遣することをお望みになられた。さらに、陛下は私に対しても、この任務の遂行に必要な指示を閣下に与えるようお命じになった。皇帝陛下の命により、閣下に、任務をお伝えします。また、この派遣任務には以下が伴うことをもお伝えいたします。1. キリスト教徒とユダヤ人との間にもっとも深刻な衝突が起こった場所を訪問し、衝突の発生とその進展に関する十分な情報を収集すること。社会秩序と平静を破る、反ユダヤ的運動の性格を持つすべての事例を詳細に描いた報告書を提出すること。地方政府が騒乱に対して講じた一般的予防及び抑止策だけではなく、逮捕者に関する処置についても報告し、逮捕者のリストも入手すること。2. ロシア南部におけるキリスト教徒とユダヤ人との間の敵対的関係の醸成に影響を与えた可能性のある一般的な社会的要因だけではなく、騒乱の第一の原因となった条件をも解明すること。騒乱の発生時間そのものから、「騒乱は、反政府分子の影響によって発生した。この反政府分子は、恐らく、この動乱の中で、『住民は大騒動を起こす力があるのだろうか、また、政府は騒乱鎮圧のためにどのような手段を用いるのか』ということを経験的に知ろうとしているのだろうか」ということを確信するのである。内務大臣侍従武官長イグナチエフ伯爵。文書課長プレーヴェ。(L. d. 84-85)。

第115号

証明書。本証明書の持参人、皇帝陛下侍従武官少将クタイソフは、皇帝から受けた特別命令を遂行するために、帝国の様々な地域に向けて出発する。これが真実であることを証明するために、この証明書が彼に与えられた。彼は、ロシア帝国のすべての地域を自由に通過し、そこに滞在できる。1881年5月13日。国家警察局長プレーヴェの署名。(L. d. 93)。

第116号

内務省。ポルタヴァ県知事より。官房扱い。第1課。1881年5月7日。第2449号。ポルタヴァ市。国家警察局長へ。

『ゴロス』紙第121号に、ポルタヴァから以下のようなニュースが掲載されていた。「4月24日、当地において、市全域において、下層民たちに対して、ユダヤ人や裕福な階級への攻撃を呼びかける扇動的な宣言が行われた。宣言のそのような内容は、ポルタヴァからガジャーチまでの沿道の家々に郵便で配布された。この犯人である、聖職者の息子と地主が逮捕された。…」昨年4月24日に発布された内務大臣の回勅第1617号に基づいて、国家警察局長に以下報告致します。上記の報道は完全な誤りである。下層民に対してユダヤ人や富裕層への襲撃を呼びかけるアピールなど、ポルタヴァ市でもポルタヴァからガジャーチの沿道でも私の管轄する地区のいかなる場所においても伝えられていないし、もちろん、その後、上記の犯行現場においても誰も逮捕されていない。県知事ピリバソフ。(L. d. 94)。

第117号

内務大臣。ポルタヴァ県知事。官房扱い。第1課。1881年5月7日。第368号。ポルタヴァ。秘。内務大臣殿。

私が発布し、クリュコフ郊外の警察署長が鉄道修理工場において行った公示は、4月30日の第345号において私が閣下にすでにお伝えしてあります。これは、住民に対して、ユダヤ人に対するあらゆる暴力行為を警戒するよう命じるものであります。この公示の際に、修理工場の労働者たちが、『ゲロリド』紙第112号に、ユダヤ人を攻撃するように労働者たちに呼びかけるメッセージが載っていたと言いました。そして、彼らは、この新聞がペテルブルグで発行されたものであるため、このメッセージが政府によって公認されたものだと考えたとも述べました。その際、彼らは、第112号の一部を警察署長に見せましたが、実際に、そのような呼びかけが、ドイツ問題に関する社説の中に載っていました。クレメンチュークの警察署長は、この件を私に報告し、「かの警察署長の説明があつてからは、労働者は自分たちが新聞の呼びかけを間違つてとらえていたことを認めて、県知事が発布した公示のほうを受け入れた」と述べました。以上報告いたします。県知事ピリバソフ。(L. d. 96)。

第118号

ドイツの新聞『ゲロリド』第112号の「政治解説」欄

に、ポズナニ公国の「アルゲナウ」地方における反ユダヤ騒乱に関する記事が載っていた。これは、シナゴグに貼り付けられた宣言文をきっかけとして起こったものである。この宣言文は、上記の新聞第112号に全文転載されていた。宣言文は下記のとおり。キリスト教徒への呼びかけ「目覚めよ。すべてのキリスト教徒よ。ユダヤ人のくびきを振り捨てよ。キリスト教の抑圧者をパレスチナに追いやれ。集まれ、集まれ！すべての村民や町民はユダ公を打て。犬を打て。騙す者を打て。地獄の末裔を襲撃せよ。征服されたキリスト教徒よ。何も恐れるな。すばらしい英雄があなたがたの前を進むからだ。臆病になるな。我々のわずかな財産について話しているのだから。ユダ公をつまみ出せ。ビスマルク万歳。ヘンリツィ博士万歳。シュトッカー博士万歳。」

Aufruf an die Christenheit!

„Wachet auf, ihr Christen, alle und schüttelt ab das Judenjoch. Treibt sie heraus nach ihrem Palestina, die Unterdrucker der Christenheit; sammelt, sammelt Euch: zu Hilfe alle, alle aus Dorfern und Städte, alle ingesamt. Haut die Juden, haut die Hunde, haut die Betrüger, sturmet die Hollenbrut. Furchtet nichts, ihr unterjochten Christen, denn einguter Held geht uns voran. Nun, so seid nicht feig, es gilt nur zu retten unser bischen Hab und Gut Raus mit den Juden. Bismark lebe hoch, Dr. Henrici lebe hoch, Dr. Stocker lebe hoch“. (L. d. 99)。

第119号

ハリコフスカヤ臨時総督の提案。1881年5月3日付。第185号、ポルタヴァ県知事殿へ。

ユダヤ人居住地区における騒乱を防止するために、現在、かなりの数の兵隊が自分の正規の任務から離されている。部隊がまもなく夏期訓練に入るので、社会の安寧を守るためのこのような手段は、長期にわたって維持できない。そのため、私は、閣下に対して、以下について早急に通知していただくよう御願います。閣下の管轄する県において、社会の安寧を維持するためには、軍隊を除いて、どのような手段が可能であるとお考えか。また、部隊はいつ野営に出ることができるとお考えか。このこととは別に、私はさらに閣下に以下についても御願います。キリスト教徒のユダヤ人に対する敵対的感情が今日このようにあるのは何故だとお考えか。この感情は、反政府思想の持ち主による教唆によって起こっているとお考えか。この最後の状況については、私は、事実を挙げながら、詳細に説明したい。(L. d. 101)。

第120号

秘。内務省。ポルタフスカヤ県知事より。官房扱い。文書課。1881年5月7日第373号。ハリコフ臨時総督殿。

5月3日付第185号の提案において、閣下は、私に対して、私の管轄県において社会の安寧を保つのに、軍事力以外で、どのような処置を講じることができると考えているか、また、部隊はいつになったら野営に出ることができるのか、早急に連絡するように依頼しておられる。また、これとは関係なく、キリスト教徒のユダヤ人に対する敵対的感情が今日このようにあるのは何故だと思いか、また、この感情は、反政府思想の持ち主による教唆によって起こっていると考えているか、とも尋ねておられる。上記について閣下に対して答えるに際し、事実無根のことを申し上げたくないもので、私の管轄県にある諸都市を守っている警察力だけではなく、県の現状についても注意を払っていただかねばならない。県下のポルタヴァ市（人口40,000人）では、下級警察官は76人いる。クレメンチュグ市（人口35,000人）には550の警察官がいる。郡部の諸都市では、警察官の数は様々である。平均して9人から16人であり、月給は7から12ルーブルしかない。このような少額の給与しか支払われていないため、あまりレベルの高くない人々が警察の業務についているのである。しかも、彼らは勤務を重視していない。頻繁に交代するので、警務につく人々は勤務内容についてほとんど知らないか、知っていても、漠然とした理解しかないのである。このような警察の警備隊では、平時でも十分とは言えないのに、非常時においてはなおさらである。しかし、私が閣下に報告した町においてだけではなく、私の管轄下にある他の町々においても、また、大きな商業地においてすら、住民は非常な恐怖の中にあり、来る日も来る日も、当地に住むユダヤ人への襲撃を恐れている。私は至る所から、軍隊の駐留や他の手段を講じて平和を保障してくれとの住民の嘆願を受けている。閣下には、私が正当と判断し、有益であると認めた処置をお知らせした。ご承知のとおり、これらはすべて、発生した騒乱を武力鎮圧するために小隊を常駐駐留させるという処置と密接に関係している。県内に部隊を駐留させることは、疑いもなく、ある程度まで群衆の興奮を抑えている。しかし、それでもなお、全体的な騒乱や騒動にまで発展しない暴力行為が毎日繰り返されている。これらが全体的な騒乱や騒動にまで発展しないのは、発生時に、騒乱が長引かないように精力的に予防措置を取っているからにほかならない。5月3日付の私の電報からお分かりのとおり、ロムヌイにおいて、ユダヤ人の商店を破壊しようとした群衆は、2つの騎兵中隊によって解散され、一つの破壊行為も暴力行為も起きなかった。同じ日（5

月2日)に、ポルタヴァにおいて、次のような出来事が発生した。1、郊外の集落クリヴォハトキにおいて、6人の労働者が居酒屋にやって来たが店が閉じていたのを見て、窓を割った。主人が出てくると、頭を2発殴り、ウォッカ半クワルタを飲んだが金を払わなかった。彼らのうち2人が逮捕された。2、別の6人がゼルター炭酸水を売るために小さな店に立ち寄った。何杯か飲み、ピロシキとお菓子を食べたが、やはり金を払わずに立ち去った。彼らの顔はすべて警察に知られている。3、20人ほどの労働者が、鉄道の駅から乗り物に乗って通りかかった2人のユダヤ人に気づき、彼らに殴りかかり、旅行鞆を奪った。彼らのうち4人が逮捕された。4、数人の労働者が、夜の3時に居酒屋に近寄って店が閉じているのを見て、よろい戸を壊し、窓ガラスを何枚か割った。5、2人の労働者が、町の中心部を歩いていると、ユダヤ人の持ち物であったオレンジ入りの籠をひっくり返した。このため、ユダヤ人との間で取っ組み合いの喧嘩が始まった。彼らのうち一人が逮捕された。社会の空気はかくのごとしである。反ユダヤ的風潮がどうしてこのような激しい形で現れたのか原因を調べると、多くの小さな事柄を除けば、3つの本質的な要素がこの事柄において意味があると分かった。

- 1) 政治的プロパガンダ
- 2) ユダヤ人の生活習慣の排他的状況
- 3) 貧しい階級の住民の、現在の厳しい経済状態

この反ユダヤ的運動には、政治的な基礎があり、ユダヤ人を襲撃するという外貌の下には資本家に対するプロレタリアートの戦いがある、と私は確信している。第一に、そのような騒動や類似した騒動・騒乱は、宣伝者たちの政治的な煽動行為の計画に含まれているからである。より裕福な何人かのユダヤ人のもとに、脅迫文が届けられた。これは、宣伝者たちが実際に利用している手段である。鉄道修理工場の労働者たちは、騒乱を指揮する指導者の登場を待っていた。第二に、これらの騒乱は一箇所ですべて終わったのではなく、町から町へ伝わり、キエフのような住民の民族構成においてユダヤ人の比率がわずかしかないが、プロパガンダに接する人の数がかなり多く集中しているためにアジテーションには適している都市においても発生した。第三に、これらの乱暴狼藉は暴力だけではなく、つねに略奪が伴った。リベラルなマスコミはこの状態をほかそうとしており、ユダヤ人の紙幣を奪った行為を、何か私利私欲のない剛胆な行為として提供しているようだ。エリサヴェトグラードだけではなく、キエフや他の場所においても、騒乱には怖い略奪が伴ったとい

う知らせが、情報源から直接私に届いている。これらの惨禍によって、プロパガンダの騎士たちは、民衆を野獣のような本能に慣らそうとしているのである。第四、民衆の噂では、地主に対する制裁が早急に行われるはずであり、その手始めとして騒乱が発生する。県全域において、「地主の土地の分割がまもなく行われ、それを望まない人々に対しては力による強制が行われる」とか、「地主らが、1日1ルーブル以上の日雇い仕事を提供するそうだ」などという噂が広まっている。第五、ユダヤ人に対する騒乱は、ユダヤ人によって最も搾取されていると思われる階層から出ているのではなく、職人階級から出ているのである。この階層は、他の階層と比べて、ユダヤ人の搾取をそれほど受けておらず、むしろ、プロパガンダの影響をより強く受けているのである。これこそ、この運動の政治的側面に関して私が抱いている確信である。私は、これが間違いであることを願っている。

第2点と第3点において、なぜユダヤ人だけがよい生活をし、他の貧しい階級の人々が厳しい経済状態に陥っているか理由を示したが、これについては、これ以上説明する必要はないと考える。私は、現在住民が抱いている感情は、悪意のある教唆から生まれていると考えている。私は、説得と、予防策、騒乱の初期における鎮圧を含むすべての対策を、この考えに基づいて講じているのである。鎮圧の際には、断固とした厳しい措置を講ずるように私は警察署長に対して命令した。厳しい手段が講じられると、必然的に軍隊が利用されることになる。これは、騒乱に伴った民衆の熱狂や恐怖が大きくなったり長引いたりすることがないためである。ロムニでの例や、上述したようなポルタヴァでのケースは、これらの措置が適切なものであったことを証明しているのである。県内に現れた群衆による騒乱は拡大しつつあるが、これは、軍隊の投入がなければ抑えることができない。平時において、郡内の諸都市には、70人の警官が配備されており、警察の警備隊と地方部隊を構成している。この70人を、暴動の鎮圧のために派遣できるとしても、わずか20人であり、官庁の金庫と銀行の警備にしか手が回らないので、もし現時点で警察だけに県内の警備を任せるということになると、騒乱を鎮圧できないだけではなく、逆に、軍隊の出県に伴って、騒乱が新たに勃発することになると確信する。というのも、民衆の間では、軍隊が宿営に出ると、すぐに騒乱が始まると噂されているからだ。上記の人数の警察部隊や地元の軍隊を除けば、騒乱鎮圧の際に私が利用できる手段は県内には全く存在しないのである。地元の警察を利用するなど、社会の安寧を守るための手段に訴えることが仮に可能であったとしても、ここで一度も使用されたことのない新しい方法を自分の組織にとって役立つように整えるには、か

なりの時間が必要であり、この準備をしている間に軍隊は野営から帰ってきてしまうだろう。以上から、私は、現在住民がこのように警戒している中において、政府当局が、軍隊を県外に出すことによって、一触即発で起こり得る騒乱を鎮めるために存在する手段を無力化してしまうことは断じてできないと考えるし、また、秩序が回復するまで軍隊を県内に留めておくことが絶対に必要だと考えるのである。現在の警戒感が和らぐのをいつまで待つことができるかについて考えているうちに、私は、次のことに気づいた。すなわち、先に挙げたこのような警戒状態を生み出すに至った3つの原因のうち、最初の2つは、比較的長い間影響力を持ち続けるが、3つめは、豊作の見通しが立ち、刈り入れが始まる頃になると、かなり影響力が小さくなるはずである。このことを考慮すれば、現在の警戒感では、1ヶ月後に和らぐだろう。事態が沈静化し、軍隊が県外に出られるようになるかどうかについては、私は、県の都市部以外の地域に配置されている軍隊について述べているのである。ポルタヴァについて、7月にここにおいて、南部地方全体の経済に大きな影響力を持つ、取引高数百万（入荷は150万、売り上げ100万）のイリンスキー市が始まる。このような大きな意味を持つバザールにおいて平和を維持し、安全を確保することは、政府が特別に配慮しなければならないテーマである。商売において安全性が守られないのではないかと疑いがほんの少しでもあれば、それがどんなに根拠のないものであっても、そのような事態に対してきわめて敏感に反応する商売に悪影響が及び、売上高は減少するだろう。私は、自分の立場から、次のことを無条件で行わなければならないと考える。すなわち、ここに駐留しているエレッキー連隊や他の軍隊が野営に出ることによって町の警備が手薄になるような事態を避けること。また、夏いっぱい町に連隊を駐留させるかどうかという問題を解決し、このことに関して帝国全土に公告を出して「しかるべき処置を講じた結果、バザールは、群衆の暴動や騒乱から完全に守られる」ことを証明し、商人たちの不安を払拭すること。県知事ピリバソフ。(Ll. d. 102-103)。

第121号

内務省。ハリコフ県知事より。官房扱い。1881年5月7日。第732号。ハリコフ。内務大臣殿へ。

エリサヴェトグラード、キエフ、他の南ロシア地域において起こった騒乱は、ハリコフの場合も、傷跡を残さずに過ぎ去ることはなかった。ハリコフにおいても、最近、次のような噂が広がり始めた。すなわち、「キリスト教徒が、ここに居住する1万人のユダヤ人に対して襲撃を準備しており、この襲撃を率先してい

るのは、主に鉄道修理工場の労働者である」と。これについて、ユダヤ人への暴行についての布告が至る所で配布され始めた。このため、もし予防手段が効果的ではないことが明らかになった場合、あらゆる騒乱を未然に防ぎ、発生した騒乱をすばやく精力的に鎮圧するために、地方当局はあらゆる手段を講じるだろう。さらに、私は、地元の軽工場や重工場や他の工業施設の経営者や、さらに、労働者と直接に対決することになったすべての人々を招いて、労働者に次のことを説明してもらうようにお願いすることは、きわめて適切な処置であると考えた。すなわち、「ユダヤ人への襲撃は違法行為であり、この襲撃によって、ユダヤ人だけではなく、キリスト教徒の住民も害を被っている」ということ、さらに、「もし彼らが騒乱の参加者であることが判明したら、犯人たちにどのような刑罰が下るかにについて」。この結果、招かれた人々の側から、「労働者に公告を出して欲しい」及び「本年5月8、9、10日の祭日には居酒屋をしめるようにして欲しい」という要請があった。私は、この要請は尊敬に値する行為であると認め、本年4月8日付第1693号の閣下の前任者の通達に従い、また、侍従武官長スヴァトポルク・ミルスキー公の許可に基づき、ハリコフ市と郊外の村落にあるすべての居酒屋に対して、指定された期間において、午前11時より前に店を開けないよう、また、夜8時以降は店を閉じるよう指示した。さらに、ハリコフ市民及び労働者たちに対する公告を必要枚数だけ印刷し、すべての修理工場や軽工場や重工場に最新版を貼るように手配した。上記、閣下に報告いたします。また、今までのところ町の秩序は保たれていることをも慎んで申し添えます。県知事グレセリ。(L. d. 109-110)。

第122号

ミンスク県知事。秘。N・P・イグナチエフ伯爵殿へ。ニコライ・パヴロヴィッチ様。

閣下に以下報告いたします。エリサヴェトグラード市やキエフ市や他の地域においてこの数カ月に起こった騒乱についての噂が、非常に誇張された形でミンスク市に伝わっており、ユダヤ人の住民の間では、当地においても同じようなことが起こるのではないかと心配と不安が広まっています。すべての起こり得る偶発事件の防止と、悪意のある人々から出た馬鹿げたうわさ話が広まらないようにするために、私は、ユダヤ人の中の有力者を呼び出し、あらゆる手段を講じて同信の人々に平静を保つように説得して欲しいと述べた。また、自分達を脅かす者は何もないので安全であることを確信させて欲しいとも述べた。その後、県の軍隊長及び鉄道憲兵局長との合意に基づいて、本日、市の夜

間パトロールが強化され、開始時間が早くなり、モスクワ・ブレストやリバヴォ・ロメンスキー各鉄道路線でミンスクにやってきた人々に対して厳重な警戒が払われた。特に、労働

者や職人の党や組合に対しては格別厳しい監視がついた。彼らは町を通過してやってきて、住民に反ユダヤの感情を起こさせる可能性があるからだ。5月15日頃に行われる予定の軍の通常野営に不安を覚えているミンスク市のユダヤ人住民を完全に安心させるために、また、なんらかの騒乱の発生に備えて町の中に十分な規模の軍隊を保持しておく必要があるため、私は、ヴィレンスキー軍管区の司令官に対して、しばらくの間、地元師団から(1大隊ではなく)30連隊の中の1連隊を欠員なく町に留めてくれるよう要請した。同じく私は、住民の間で発生する恐れがある何らかの騒乱を予防するために、自分に任されている県のすべての地元警察に、しかるべき指示と命令を与えた。また、付言すると、郡や都市の警察署長の報告によれば、ミンスク市を含め県内の郡や都市の住民は、非常に落ちついており、帝国南部の諸県において発生した騒乱に類する事件を引き起こす恐れのある反ユダヤ感情の高まりを示す兆候は、これまでまったく見られない。敬具(署名不明瞭)。第165号。1881年5月8日。(Ll. d. 112-113)。

第123号

ペテルブルグ。内務大臣へ。1881年5月13日付オデッサ発電報第5576号。

昨日5月12日6時頃、様々な社会的立場にある2000人以上のユダヤ人が市立病院の近くに集合した。5月4日の騒乱の際に受けた傷がもとで死んだ同信者の遺体を運ぶためである。葬列は、近くにある墓地を目指して、人口の多い主要な通りに沿って迂回しながら進んだ。また、物故者が貧しかったにも関わらず、葬儀は、聖歌隊と孤児院の生徒たちが伴い、非常に荘厳な雰囲気の中で執り行われた。この葬列を示威行為とする意図は明かであり、これは、新たな衝突を生むきっかけとなり得たので、警察は、群衆ができないように処置を講じ、人々を解散させ、執拗な反抗に直面した場合には、近くの地区から12人のコサック隊を呼んで、集まった人々を解散させた。この措置のおかげで、騒乱は起こらなかった。騒乱の部隊となった場所から私のもとに届いた詳細な報告はほとんど次のことを異口同音に証言していることを言わずにはおれない。すなわち、騒乱の最も直接的な原因は、ユダヤ人自身がきわめて不注意な行動を取ることがときどきあり、また、相手を挑発したり、相手にうさがられるような行為をしたりすることが多かったということである。最近、この挑発的な行為は、オデッサにおいても多数起こって

る。現在、私は、ユダヤ人が限度を超えた振る舞いに出ないように手綱を締めるべく努めている。侍従武官長ドンドウコフ公。(Ll. d. 121-122)。

2012年8月1日受理